

【暗証聖句】

「御父がどれほどわたしたちを愛してくださるか、考えなさい。それは、わたしたちが神の子と呼ばれるほどで、事実また、そのとおりです。世がわたしたちを知らないのは、御父を知らなかったからです」ヨハネの手紙一 3 章 1 節

【日・私たちは神の家族の一員】

エフェソ 3 章 14、15 節「こういうわけで、わたしは御父の前にひざまずいて祈ります。御父から、天と地にあるすべての家族がその名を与えられています」

15 節の御父はパテール、家族はパトリアで語呂合わせをしています。これはパテール(父)にちなんでパトリアと呼ばれるわたしたち。もう少し言うと、天と地にいるわたしたちすべてが、天の御父から出た同じ一族・家族(パトリア)である、という意味です。天と地というように居場所が違おうと、2000 年前と現代というように時代が違おうと、アフリカと日本というように歴史・文化が違おうと、すべてのクリスチャンは御父に連なる同じ一族であるということであり、大切な真理です。時代を超え、世界中の神を信じる者たちは、「天の父なる神様」と同じ神様の名を呼んで祈り、賛美をささげています。これはイエス様も同様でしたし、み使いたちも同様です。天の家族と地の家族は一つなのです。

また、出エジプト記 3 章 10 節で、神様はモーセに、「今、行きなさい。わたしはあなたをファラオのもとに遣わす。わが民イスラエルの人々をエジプトから連れ出すのだ。」とお命じにされましたが、イスラエルを我が民と呼んでいます。また、ガラテヤ 3 章 26～28 節にかけて、「あなたがたは皆、信仰により、キリスト・イエスに結ばれて神の子なのです・・・そこではもはや、ユダヤ人もギリシア人もなく、奴隷も自由な身分の者もなく、男も女もありません。あなたがたは皆、キリスト・イエスにおいて一つだからです」とあります。私たちが神様の民、神様の家族となったのは、イエス様に結ばれているからです。そして、同じ家族なのですから、そこには身分の違いは一切存在していません。

【月・すべてのものの所有者なる神】

ダビデはエルサレムにレバノン杉と言う当時の最高級の木材を使った立派な王宮を建てましたが、契約の箱は幕屋の中に置かれたままでした。そこでダビデは、契約の箱を安置できる神様の家、すなわち神殿を建てようとするのです。しかし、神様はダビデは戦いの人であり、罪を犯してきたことから、神殿を造ることを許されず、息子のソロモンの代になったときに建てることになりました。ただダビデは主の宮のための材料を集めることを許されました。ダビデは残りの生涯を、膨大な量の建築資材を集めるのに費やしました。そして、数えきれないほどの量の資材が集まったとき、次のように祈りました。歴代誌上 29 章 13、14 節「わたしたちの神よ、今こそわたしたちはあなたに感謝し、輝かしい御名を賛美します。このような寄進ができるとしても、わたしなど果たして何者でしょう、わたしの民など何者でしょう。すべてはあなたからいただいたもの、わたしたちは御手から受け取って、差し出したにすぎません」

ダビデは自らと民が時間とお金をかけて準備したすべてのものは、神様からいただいたもので、それを差し出したに過ぎないと言っています。ここに私たちが神様に捧げものをするときの大切な教えがあります。詩篇 24:1 に「地とそこに満ちるもの、世界とそこに住むものは、主のもの」と書かれてあります。また、ハガイ書 2 章 8 節では、「銀はわたしのもの、金もわたしのものと万軍の主は言われる」と書かれてあります。この世界にあるものは、自然の命も金銀も、すべてのものは神様から来ているのです。それを私たち一人ひとりに託されたのです。献金とは、もともと神様から与えられたものの一部を、お返ししているに過ぎないのです。

【火・神の家族のための資産】

自然の命も金銀も、すべては神様からの賜物です。神様は常に私たちが必要なものを与えたいと思っておられます。その神様からの賜物の中で最も大なるものは、イエス様です。これは他の何物とも比較にならないものです。

ヨハネ 3 章 16 節「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。」

神様が御子イエス様を私たちに与えてくださいました。それにより、私たちは神様からの愛を見える形で与えられました。イエス様の命をいただき、永遠の命への希望が与えられました。罪の赦しが与えられました。平安と喜びが与えられました。生きる光が与えられました。この他にも、数えきれないほどの恵みをイエス様を通して父なる神様から与えられています。このことからわかることは、私たちの救いは神様からの賜物であるということです。この神様からの素晴らしい贈り物を常に私たちは瞑想し、生活の中心に置くことが大切です。神様はイエス様を与えてくださったばかりでなく、何を食べようか、何を飲もうか、何を着ようかと悩むことのないように、生きていくうえで必要なものをすべて与えてくださるお方なのです。それゆ

えダビデは、「主は羊飼ひ、わたしには何も欠けることがない」(詩篇 23:1)とすることが出来たのです。同じ詩篇の詩編 37 編 25 節には、「若いときにも老いた今も、わたしは見ていない。主に従う人が捨てられ、子孫がパンを乞うのを」と書かれています。世界的な物価高の中で、多くの人が不安を感じていることでしょう。しかし神様にすべてを委ねるとき、その不安も消えていきます。すべては神様のものであり、神の子の必要をいつも覚え、最善の方法で満たして下さるからです。

### 【水・神の家族の一員としての責任】

私たちが神の家族の一員となるために、神様からどれほど大きな賜物をいただいたのかを考えたとき、申命記 6 章 5 節で「あなたは心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい」とのみ言葉は、当然のことと思えることでしょう。イエス様もこの言葉をマタイ 22 章 37 節の中で引用しておられます。では、どのように私たちは心を尽くして主を愛せば良いのでしょうか。申命記 10 章 12、13 節に、「イスラエルよ。今、あなたの神、主があなたに求めておられることは何か。ただ、あなたの神、主を畏れてそのすべての道に従って歩み、主を愛し、心を尽くし、魂を尽くしてあなたの神、主に仕え、わたしが今日あなたに命じる主の戒めと掟を守って、あなたが幸いを得ることではないか」と、主を恐れつつ、すべての道で戒めを守って生きることであり、答えが書かれています。ヨハネの手紙一 5 章 3 節でも、「神を愛するとは、神の掟を守ることです。神の掟は難しいものではありません」と書かれています。聖書協会共同訳では、「神の戒めを守ること、これが神を愛することだからです」と、より一層戒めを守ることの重要性が強調され、神様を愛することと関連付けられています。私たちはまず先に神様から愛されていることを知り、神様の戒めを守りたいという思いが与えられます。同時に、私たちが神様を愛する手段も、神様の戒めを守ることなのです。勘違いしてはならないのは、それは決して救いの手段ではないということ。神様との愛の関係の中で、自然に芽生えるものなのです。

### 【木・天に宝を積む】

イエス様は、「あなたがたは地上に富を積んではならない・・・富は天に積みなさい・・・あなたの富のあるところに、あなたの心もあるのだ」(マタイ 6:19~21)と言われました。神様はこの世の富を決して悪であるというように否定しているわけではありませんが、心がそれに捕らわれてしまうなら、天国への思いは薄れていくことでしょう。富のある所、すなわち一番大切に思っている宝のあるところに心もあるからです。

慶應義塾大学の前野隆司教授は、「頑張ったことによって得られる金・地位・名誉などは、短期的には幸せをもたらすが、この幸せはもともと長続きしないように、人間の心はできている。なぜなら、これらは人と戦って、勝った結果得たもので、次に備えなければ、また新たな脅威がやってくるかもしれず、『まだ足りない、もっと欲しい』と求め、いつまでたっても満たされないように、脳ができているからである」と言っています。この世の「宝」は、実に不安定なものであり、長期的に見れば、本当の幸せに導くものではないのです。

では、天に宝を「蓄える」にはどのようにすれば良いのでしょうか。それは、「与える」ことによってだと聖書は言います。宝を「蓄える」=「与える」ことなのだということです。イエス様はこう言われました。「もし、あなたが完全になりたいなら、帰って、あなたの持ち物を売り払って貧しい人たちに与えなさい。そうすれば、あなたは天に宝を積むことになります」(マタイ 19 章 21 節)「与える」ことは犠牲を伴います。しかし、私たちの心が天にあるならば、言葉を換えるなら、私たちの心がイエス様とつながっているなら、この地上の富を神様のために用いることに喜びと意義を感じることでしょ。そのとき、この世の富から心は解放され、天に富を蓄えることになり、真の幸福がおとずれるのです。